

カフカの「城」に関する試論(19)： 助手達をめぐ る覚書

著者	芳野 昇
雑誌名	日本歯科大学紀要．一般教育系
巻	29
ページ	1-10
発行年	2000-03-20
URL	http://doi.org/10.14983/00000510



カフカの「城」に関する試論

XIX. 助手達をめぐる覚書

Versuch über Franz Kafkas Schloß

XIX. Notiz um die Gehilfen

新潟歯学部 芳 野 昇

Noboru YOSHINO

The Nippon Dental University, Hamaura-cho 1-8,
Niigata 951-8580, JAPAN

(1999 年 11 月 26 日 受理)

1.

この作品『城』(Das Schloss)は主人公 K の測量技師(Landvermesser)としての地位自体が承認されないまま、途中で執筆が放棄され、未完に終わった大作であり、結局のところ K がこの東欧の寒村で自己の地位、むしろ生存権を飽く無く追求した過程、あるいは軌跡自体が物語となっている。この作品では、城当局から K 本人の賛否も問うこともなく、助手二人(Gehilfen)が派遣されていて、K に執拗にまといつき、時には K の行動を邪魔立てしたり、密通したする最も助手に相応してない自称助手達が登場する。この反意と矛盾あるいは風刺に満ちたアンビバレンスは他ならぬ作者 Kafka の一貫した手法であり、この最後の長編小説『城』においても、こうした登場人物構成が特徴の一つとなっている。

本稿ではこの二人の助手に焦点を絞って、原典に即してその形姿を分析し、覚書する。

2.

2.1. 助手達(Gehilfen)が初登場するのは第 1 章後半で、K が雪原の中を立ち寄った農

夫の家で出会った少年 Hans の母親で、村人 Brünswick の妻である、いわゆる城の娘(ein Mädchen aus dem Schloss)に一瞬神秘的な魅力をいだきながらも、ついにKは農夫達から屋外へ引き出された際に、農夫の一人の、髭顔(Vollbart)の男が城の方向からやって来た中肉中背の二人の若い男達(aus der Richtung vom Schlosse her kamen zwei junge Männer von mittlerer Größe S.26)くに、知人なのだろう、「今日は、アルトウール、今日はイエレエミイアス(Guten Tag Artur, guten Tag Jeremias S.26)」と手をかざして呼びかけた。この二人の若い男は第1章の終りで¹⁾、Kが「君達は誰れだ(Wer seid Ihr? S.31)」と問い正すのに対して、「貴方の助手達です(Euere Gehilfen S.31)」と答えている。

「二人は非常に痩せていて(sehr schlank)、窮屈そうに体にぴったりとした服を着て、顔も互いに非常に似ていて(sehr ähnlich)、顔色は焦げ茶色(ein dunkles Braun)だが、特に黒い色をした尖った顎髭には対照的であった。彼等はこの道路状態では驚くほど早く歩いて、拍子を合せて(im Takt)細い脚を投げ出すように歩くのであった」²⁾。

土着の人間で、まるで衛兵かロボットのように硬直した格好で、かつ双生児のように常に一緒に並んで歩き、共に尖った顎髭を立てて居合わせている様相は滑稽であり、映画好きの作者 Kafka が観た当時の無声映画の一場面が想定できる。更にまた勤務していた職場の同僚あるいは部下への風刺を込めた人物描写が推定できよう。

ともかく主人公 K はこの助手の二人が城から差向けられたとは初めは分からずに、橋屋へ戻る自分(K)にとっては、善良で元気づけてくれる道連れ(gute aufmunternde Wegbegleiter S.26)くに思えたのであった。

2.2. 第1章の終りで宿屋(橋屋)の入口で暗闇の中、亭主の持つランタン(Laterne)に照らされた二人の男達、即ち二人の助手達が今度はKに敬礼した(salutierten)くのである。Kはこの時、自分の幸福な時代であった兵役期間を思い出して(In Erinnerung an seine Militärzeit, an diese glücklichen Zeiten S.31)く笑ったと叙述されてある。確か作者 Kafka は兵役義務を病弱で免除されたはずであるから、この点に関しては主人公は作者とは異なっており、平常な健康青年であり、人並の愛国青年であったといえよう。

さてKの君達は誰れだ(Wer seid Ihr? S.31)くという問い質しに対して、順番に貴殿の助手(Euere Gehilfen S.31)くと答えるのであった。彼等は決して後から遅れてくるようにさせ、(到着を)待っていた彼(K)の昔馴染みの助手達(alten Gehilfen S.31)でなく、全く測量道具を持参しない(keine Apparate S.32)くという。Kの意に反して肝心の測量について何にも(etwas von Landvermessung S.32)く理解していない助手達の登場という、またしても擦れ違いの事実、あるいは思惑違いの叙述が早々に展開される羽目となっている。もちろん作者の意図した作品構成にはちがいないが、早くも罅が明かな

い前途がKに提示されており、すでにKが挫折への道を重ねていくことになっていく十分な前兆と言っても過言ではなかろう。現にKはこの類似した二人の助手に手古摺って、>全く蛇に似た君達(Ihr Euch ja ähnlich wie Schlangen S.33)<として、彼達(助手達)の区分や見分けはどうでもよいことにして、二人とも>アルトゥール(Euch beide Artur S.33)<とKは言い囃したり、また無能で、ひたすらKにまつわり付く二人の助手を非個人的にも>君達は僕にとってはたった一人の男(Ihr seid für mich ein einziger Mann S.34)<として扱うと言い張るのである。

一方、しかしKはまた健かに、この未知で無能な助手達と城当局との関係を見抜いてか、むしろ逆手にとって彼等を味方に付けたいとK自身の切迫した現状打開策の一案をめぐらしてか、「僕はこの地では一介の異邦人^{よそもの}で(ein Fremder)、君達が僕の昔馴染みの助手であるなら、君達も異邦人(auch Ihr Fremde)ということになる、それなら我々三人の異邦人は団結しなければならない(Wir drei Fremde müssen deshalb zusammenhalten)」³⁾と発言している。もちろんこの助手達との距離は平行線のままで、彼等との間柄は敵対的なままで終始していく。無頼の徒Kにとって、やがて>この男(バルナバス)の方を助手にしたいくらいだ(lieber ihn als Gehilfen S.38)<といわしめる使者 Barnabas や有力村人 Brünswick の息子 Hans を助手にしたい心境が募っていくが、その展開が語られずに作品は中断されてしまった。

2.3. 第4章の橋屋の女将 Gardena との最初の面談で、村八分の罰を受けている Barnabas 一家(die Barnabas'schen Familie)に出入りしている K を激しい口調で非難する女将ともこの助手達は旧知の仲である。自明な事柄であっても K は女将に「僕の助手達です。貴女はところが此奴等を貴女の助手で、しかも僕の看視人(Wärter)であるかのように扱っていますね。他の全ての事では貴女の御意見とは何卒議論させていただく覚悟です。しかし僕の助手に関しては違います。というのはこの場合、事柄はだって余りに明白(zu klar)ですから。だから僕は貴女に僕の助手達と話しをしないように願いますし、僕の願い(Bitte)が十分でないならば、僕は僕の助手達が貴女に返答することを禁じます」⁴⁾と言うと、居合わせた三人全ては(alle drei)、即ち女将 Gardena と Artur と Jeremias は互いに笑い合うのだった。女将の嘲笑(spöttisch lachen)に比して助手達の笑いは「彼等(助手達)の普段の、大いに意味が有るようで何の意味もない、いかなる責任をも拒む仕方で(in ihrer gewöhnlichen, viel und nichts bedeutenden, jede Verantwortung ablehnenden Art)」⁵⁾笑うのであった。こうした優柔不断で、煮え切らなく、陰険で、愚直ながら図図しく傍若無人な形姿は、少なくとも土着の下層の男達、この閉塞的な寒村に生活する若い村人達の典型としてこの助手達から確実に読み取ることができよう。

2.4. 第5章の村長の所でも誰れよりも村長自身がこの助手達と旧知の仲(Alte Bekannte S.99)であることが判明した。まずKはこの助手達が自分にとって厄介で、煩わしい(lästig)と村長に訴えると、またしても村長と二人の助手共互いに顔を見合せて笑うのであった。三者のその笑いは>区別しがたく、よく似ている(aller drei Lächeln ununterscheidbar gleich S.99)<ことをKは見逃してはいない。この三者も村にあって同族の村人達に他ならない。まるでこの村長が(また橋屋の女将も含めて)Kに差し向けた助手達であるかのように、「自己満足げな笑いで(mit einem selbstzufrieden Lächeln)すべてが自分の指令に由来するかのように(so als gehe alles auf seine Anordnungen zurück),だがしかし誰れもこのことを推測できないだろう」⁶⁾とさえKに村長は言って退けるのであった。厄介者としての助手達を扱うKと、まるで自分の手下のように大目に助手達を見る村長、新参の測量技師と古参の村人とは助手への対応が極めて対称的であり、>押し掛けた(zugelaufen)<というKの判断と、Kに割り当てられた(zugeteilt)という村長の評価とに二分されている。

第5章の最終部の描写は助手達の形姿を特徴づけている。「Kは振り返ると、助手達はいつもの場違いな精勤さで(in ihrem immer unpassenden Diensteifer)、即座にKの発言に応じて二つの戸口の扉を開けるのであった」⁷⁾。擦れ違いや場違い、思い違い(Irrtum)の諸相がKafkaの作品に一貫して展開される表現法であり、極言的にはKafkaの人間社会への認識であり、またその帰結である。そして認識した現象を悲劇的情況とも喜劇的情況とも、また悲観的様相とも楽天的様相とも叙述せずに、ひたすら克明に登場人物の形姿で暗示して、決してその正否を止揚することなく、演繹法と帰納法を適切に駆使した叙述法こそKafkaの独壇場ともいえよう。

2.5. Kは勝手に押し掛けて来た助手達を一面放任し、無視して自分の信念通り行動しつづけたのだが、結局、小学校の小使になる羽目になっても助手達は相変わらずKに付きまとい、Friedaと共に四人で教室に寄寓するという奇想天外な状況となった。ただこの間の肝心のFriedaの助手達への対応がKと異なっていて、彼等に極めて好意的であり、むしろ親近感をさへ示していることがKに憤怒と不安をいだかせるのであった。

「常日頃そして今再びフリーダが助手達と一緒にいるその根気(Geduld)は彼(K)にとっては不可解で(unbegreiflich)あった。……………でもこうした下劣な連中(gemeines Volk)を上手に使いこなすことを心得ていた彼女は全く彼等(助手達)と言い争うことなく、おまけに彼等の居合せる際に、彼等の無作法無礼な好い加減さを(von ihrer groben Nachlässigkeit)まるで些細な冗談のように(wie von einem kleinen Scherz)語り、彼等の一人の頬を甘えるように(wie schmeichelnd)軽くたたくのだった。Kは(こうした対処について)近

く彼女(フリーダ)を咎めるつもりであった」⁸⁾。

やがて紳士荘での橋屋の女将による尋問(Verhör)から解放されて、宿泊している村の小学校への帰路の途中で使者 Barnabas と再会できて、すっかり好い気分になったKは今度こそと、Frieda に助手達のことを問い正すのであった。「K は彼等(助手達)を気に止めなかったが、フリーダの笑いで初めて彼等(助手達)に気付いたのであった。彼はテーブルの上の彼女(フリーダ)の手を自分(K)の手で甘えるようにしながら(schmeichelnd)覆い隠して、ひそかに何故に彼等(助手達)をそんなに大目に見て、いやそれどころか無作法をさえ(sogar Unarten)も優しく受け入れているのか、と尋ねるのであった」⁹⁾。そしてKは無能無為で、かつ無作法な助手達を厄介払い(loswerden)して、Frieda と「二人で静かに暮せれば(zwei allein wären in den stillen Haus)どんな不自由もほとんど気にならない(vor allen Mängeln würde man kaum etwas merken)」¹⁰⁾とも、また「助手達が立ち去れば、そのことで気楽に感じられ、その結果、自分(K)は他のすべての事柄と並んで、すべての学校の小使の仕事を容易に為し遂げることができるだろう(Wenn die Gehilfen fortgehen sollten, dadurch sich so erleichtert fühlen, daß er leicht alle Schuldienearbeit neben allen sonstigen werden ausführen können)」¹¹⁾とFriedaに訴えるように言い切るのであった。ところがこの時のFriedaは決してKの側に立たなかったのである。殊に助手に関してはKとFriedaとは決定的な対応の相違が明白となり、この助手達との対応をめぐるKとFriedaの関係は致命的な破局を迎える要因となったと言っても過言ではない。

2.6. FriedaはKに同情しながらも、助手達に対しては「最善のことは彼等(助手達)をそのまま軽率な連中(das leichte Volk)として受け入れることです。そうすれば彼等このことを最もよく忍耐できるようになります(so ertrage man sie am besten)」¹²⁾とKに助言するのであった。しかしKはこの返答には満足しなく、半ば冗談で(halb im Scherz S. 199), 半ば真剣に(halb im Ernst S.199)Friedaこそが彼等と連携していて(im Bunde S. 199),あるいは少くとも彼等に対して大いなる好意を(eine große Zuneigung S.199)持っているのだと抗言して止まなかった。そしてついにKが他の何事にまして彼(K)がこの村でこれまで体験した最大の驚き(der größte Schrecken, den er bisher im Dorf erlebt hatte S.201)に至る羽目になるのだった。仰天したのはFriedaと添寝していたKの脇に、いつの間にかFriedaの代わりに助手の一人が寝ていた(statt Friedas ein Gehilfe neben ihm lag S.201)という事態が起こったのである。事もあろうにこの許しがたく、奇妙というには余りに鳥肌の立つようで、また猥雑な事態にKの忍耐は限界を越えてしまったのである。

2.7. 第12章は原典版(批判版)によればDie Gehilfen(助手達)という副題が付いてい

る。冒頭でKは助手達について解雇(entlassen)を申し渡した。君達は解雇されたのだ(Ihr seid entlassen S.212)く、そして居合せていて、涙をめぐい、沈黙しながらコーヒーを入れていたFriedaに対して、すべてを承知していたはずにもかかわらず、Kは形式的に(förmlich)助手達の解雇を知らせるのであった。このKの暴挙に対して Frieda はむしろ居直って、長官 Klamm の下を去った自分(Frieda)を彼等(助手達)が確かに追いまわして(verfolgen S.216)くいたと言う。一方、Kは「確かに連中は厚かましく、無遠慮で好色な奴等(zudringliche und lüsterne Junge)だが、彼等が君に(フリーダに)敢えて近づいていたことは気づかなかった」¹³⁾と逆に Frieda と助手達との関係の真意を新たに確信する意図をもって、わざと故意に言って退けるのであった。もちろん Frieda の方も助手達がKとFriedaの当面の共生関係を嫉妬(eifersüchtig)して、「貴方(K)を追放して、墮落させ、そして私(フリーダ)とだけ一緒に居るために(um Dich zu vertreiben, zu verderben und mit mir allein zu sein), 貴方に不利な供述をしてきた」¹⁴⁾とKの態度を意外と見なして、明言するのであった。結局のところKが助手達を全く物笑いで、子供ぼく、軽はずみで、自制心のない二人の本性(ganzen lächerlichen, kindisches, fahrigen, unbeherrschten Wesen zwei S.216 f)くに見極めるのに対して、Friedaの究極的には親愛に満ちた評価は、「彼等(助手達)の眼、この悪気のなく単純だけれども煌めく瞳、どこかしらクラムの眼差を私に思い出させ、そう、それは正しくそれ(クラムの眼差)に他ならなく、それは、彼等(助手達)の眼からは時折私に向けて閃めいた、あのクラムの視線なのです(es ist Klamms Blick, der mich manchmal aus ihren Augen durchfährt)」¹⁵⁾と、もはやKとは対極的な評価となっていて、両者はこの助手達をめぐって修復のきかなく、共存できない関係になってしまったと断言できよう。

ついに助手達の対応を契機に共生生活を始めて、まだ何日もしないでKとFriedaは破局を迎えることになった。それは大方がKのこの寒村の事情に余りにも無知で、また強引なエゴイズムにすべてが原因するというよりは、終極のところ長官 Klamm の魅力(むしろ魔力)から逃れることが出来ずに、Klamm から派遣された助手達にさえ節制のない博愛を示す女性 Frieda の生きる姿勢とが、Kとの終局を自明にしてしまったとも言えよう。Kはあくまでも「直接の原因(Anlaß)は君(フリーダ)にあったのだ」¹⁶⁾とFriedaの助手達への過保護な対応に抗言しつづけるのであった。「助手達に対する君(フリーダ)の余り親切すぎる対処(deine allzufreundliche Behandlung)は、彼等の無作法(Unarten)への容赦、彼等を笑い過ぎ、彼等の髪を愛撫し、絶えず彼等に同情して(das fortwährende Mitleid), >可哀想な人達, 可哀想な人たち(die Armen, die Armen)く君は繰り返し言って、そしてついた先程の事件(der letzte Vorfall, 助手の一人がKに添寝した出来事)ときた。こうな

ると助手達を鞭から請け出すには、僕は君にとって値段が高すぎはしなかったのさ (da ich Dir als Preis nicht zu hoch war)」¹⁷⁾。Frieda の方も更に助手の一人の「彼(アルトゥール)は繊細(zart)で、イエレエミイアスのようないかなる困難も恐れない情熱を持っていない上に、貴方(K)が彼(アルトゥール)を夜に拳で殴ったことによって、——あの殴ったことは私達(K とフリーダ)の幸福を反対方向にほとんど壊わしてしまって、彼(アルトゥール)は城へ訴えるために逃げていき、そしてまもなく再びやって来るにしても、ともかく立ち去って今はここにいないのです。イエレエミイアスはしかし残りました。(助手であった)任務中には彼(イエレエミイアス)は主人(K)の瞬き(Augenzucken)を恐れていたのですが、任務外の今となっては何も恐れてはいないのです。その彼がやってきて私を手籠めにしたのです(er kam und nahm mich)」¹⁸⁾と告白するのだった。K はすでに Frieda と Jeremias の親密な関係を察知していて、Frieda に向って「君は君の御主人イエレエミイアス様の所へ(Du zu Deinem Herrn Jeremias S.394)くと揶揄して、次のように Frieda と訣別するのであった。「僕(K)は助手達を任務から追っ払ったことを後悔していない。事情が君が述べたごとくであったなら、つまり君の貞節(Treue)が助手達の任務上の拘束(die dienstliche Gebundenheit)のみを前提にしているならば、そんな場合には、すべてが終りになったことは良かったのだ(dann war es gut, daß alles ein Ende nahm)」¹⁹⁾と強気な覚悟を表明するのであった。もちろん Frieda を見限る K の関心はもう Barnabas 家や紳士荘の御内儀、あるいは Pepi へと向けられていることも推察できると同時に、こうした Frieda への強気な態度とは裏腹に、K の新たな不安や悔恨を見逃してはならないが、まずは突進(Ansturm)する K の生きる姿勢と心情が展開されていると読み取れよう。

2.8. K が Barnabas の家で姉嬢の Olga から村八分の不名誉の挽回、むしろ逆境からの再起をかけた計画(Olgas Pläne)を聴取していた時、追放したはずの助手がよりもよって Frieda に依頼されてと、K を探しに、それも Jeremias だけがやって来るのであった。またまた K は予期できずに不意打ちをくらわされる羽目となった。Jeremias によればもう一人の助手「彼(アルトゥール)は任務を放棄しました。とにかく貴方(K)は我々(助手達)に少しばかり全く厳しすぎ(ein wenig gar zu hart)ました。(アルトゥールの)傷つきやすい敏感な心は(die zarte Seele)それに耐えられなかったのです。彼(アルトゥール)は城へ帰って貴方に対して苦情(Klage)を告げているところです」²⁰⁾と K に反論して止まなかった。そして K の下にこれらの助手達を派遣した張本人は Klamm の代理人である Galater という役人であることが初めて判明したのである。更に Jeremias は K 自身も自分達助手と同様にこの城が支配する村にあっては、一介の雇われ人にすぎなく(nur ein Angestellter S. 368)く、その上に一度も本当に「城の雇われ人(ein Schloßangestellter S.368)くに真に承認

されてはいないじゃないか、と K を責めたてて、K のそれまでの彼等(助手達)に対する情け容赦なさを(diese Rücksichtslosigkeit S.368)人豹変したごとく能弁に詰って憚らないのであった。

2.9. 二人の助手, Jeremias と Artur の名前について Elizabeth M. Rajec は「イエレエミイアス」はヘブライ語から派生され、ヤーヴェ (Jahwe) が任命して、命令した、あるいは決定したと訳され、……アルトゥールは古代英語から派生し、その意味はしかし全く解明されていない。Yonge²¹⁾はアルトゥールはケルト語のアルド (ard) に由来して、高い (hoch), 高潔な (noble), 高貴な (edel) 等を意味している、と推定している。派遣された者 (der Entsandte) であるイエレエミイアスと高貴な素姓 (der nobler Herkunft) であるアルトゥールは、彼等の名前の意味と小説の原典とで一致している」²²⁾。

Marthe Robert はこの半ば子供ばく、半ば悪魔的な助手達はなかなか解釈しがたい、主人公 K は彼等助手達に対してかなり自己矛盾を露示していて、絶えず誤解を生んでいると、適切な見解を表している。更に K は「彼等を未知の者、居てほしくないわずらわしい、役立たない連中として扱い続けるのに、城のこの処置にはげしく異議を唱える。この矛盾は新しいものと古いものととの間に潜在する葛藤のもう一つの面を明らかにしてる」²³⁾と解釈している。M. Robert の異色なこの Kafka の『城』論の表題はこの助手達をめぐる旧体制と新体制の矛盾、葛藤をアピールしてか、「L'ANCIEN ET LE NOUVEAU (古きものと新しきもの)」となっている。

Wilhelm Emrich はこの助手達を「生気満れる無反省さを前提とした根源的な諸力」と規定して、村人に代表される世俗性の反映としてまず解釈し、更に「すべての世俗的なものの死的退廃、ヴェストヴェスト伯爵の支配する死的退廃の表象」として世紀末的観点からの解釈を展開している²⁴⁾。

Hartmut Binder は助手達が Kafka 並びに K の性に関する諸相を暗示しているとして、「助手達はなるほど稚拙であるが、Kafka 自身自覚して、抑えるように努めた、性欲の代行者」²⁵⁾と指摘している。

また Kafka 研究家でもあるドイツ現代作家 Martin Walser は Kafka の三大長編小説にきまって登場する主人公の随伴者 (Begleiter) を枚挙して、『城』での助手達は K を少しでも「陽気にする」役割をもっていて、……それから随伴者として、身動きや身振り等で、主人公達の気構えをそらしたり、主人公達の仕事を邪魔したりする役割を実際に果している」²⁶⁾と論究している。

更に加筆すると、1911 年に Kafka が鑑賞した Josef Lateiner 原作のユダヤ演劇「Mensch und Meerschmed」に登場した助手達が原姿ともなっている²⁷⁾。また若き Kafka が私淑したスイス

の作家 Robert Walser に『Der Gehülfe(助手)』(1908 年)という長編小説がある。

3.

総括的に言及すると、K と Frieda との一時の共生を掻き乱す要因としての助手達は、もちろんこの寒村に生きる村人、とりわけ若者の群像の一つであり、また作者 Kafka のかつての職場での同僚や部下達の類型ともいえよう。そして自伝的な視点からすると、Frieda のモデルと考えられている Kafka の恋人 Milena Jesenska の夫 Ernst Polak と助手の一人 Jeremias を重ね合せて分析することは十分可能であろう。

Anmerkungen

- 1) Max Brod 編の初版 (Kurt Wolff 版) と Schocken 版では第 2 章に配置されている。
- 2) Kafka, Franz : Das Schloß, Kritische Ausgabe, S.Fischer,1983,S.26.
- 3) Ebd.S.34.
- 4) Ebd.S.86.
- 5) Ebd.S.87.
- 6) Ebd.S.99.
- 7) Ebd.S.120.
- 8) Ebd.S.154f.
- 9) Ebd.S.197.
- 10) Ebd.S.198.
- 11) a.a.O.
- 12) Ebd.S.199.
- 13) Ebd.S.216.
- 14) a.a.O.
- 15) Ebd.S.219.
- 16) Ebd.S.217.
- 17) a.a.O.
- 18) Ebd.S.393.
- 19) a.a.O.
- 20) Ebd.S.367.

- 21) Yonge, Charlotte Mary : History of Christian Names, 2 v.London, Parker,1863.
- 22) Rajec, Elizabeth M : Namen und ihre Bedeutungen im Werke Franz Kafkas, Peter Lang,1977,S.156.文中の Jahwe は旧約聖書に記されているユダヤ教の神エホバを指す。
- 23) Robert, Marthe : 古きものと新しきもの,城山良彦他訳,法政大学出版局,1973,p.276.
- 24) Emrich, Wilhelm : Franz Kafka, Athenation,1975,S.348ff.
- 25) Binder, Hartmut : Kafka Kommentar zu de n Romanen,Winkler, 1982,S.357.
- 26) Walser, Martin : Beschreibung einer Form, Ullstein, 1973,S.42f.
- 27) Müller, Hartmut : Franz Kafka, ECON, 1985,S.89.

尚, 引用文の () 内は原文に即した筆者の補註である。